

大阪狭山市文化財報告書8

狹山神社遺跡  
試掘調査報告書2

1992.3

大阪狭山市教育委員会

## はじめに

近年、大阪狭山市内におきましても、開発工事の増大に伴って緊急発掘調査の件数も増大の一途にあります。このような開発に伴う発掘調査に対して万全を期すことはもちろん重要ではありますが、それとともに市内に所在する文化財の研究を進め、本市の歴史を解明することも大切な課題であります。

このような認識にたち、本市教育委員会でも市内の諸遺跡の調査研究を少しづつではありますが進めてまいりました。狭山神社遺跡につきましても、昭和63年度より継続的に測量調査、試掘調査などを実施してきております。本書には平成2、3年度に実施いたしました2箇所の試掘調査の結果を掲載いたしました。調査では神社の参道や、焼土壙などを検出し狭山神社の歴史を考える上で貴重な成果を得ました。

調査に関しましてご協力いただきましたみなさまには、深甚の謝意を表すとともに、今後とも格段のご支援をお願い申し上げます。

平成4年3月

大阪狭山市教育委員会

教育長 上谷三郎

## 例　　言

1. 本書は、大阪狭山市教育委員会が市内文化財保護の一環として行った大阪狭山市半田5丁目所在狭山神社遺跡の試掘調査報告書である。
2. 調査期間および調査担当者は以下のとおりである。

1区	調査期間	平成3年2月18日～2月28日
	調査担当者	市川秀之（大阪狭山市教育委員会社会教育課文化財保護係）
2区	調査期間	平成3年5月7日～5月14日
	調査担当者	市川秀之、植田隆司（大阪狭山市教育委員会社会教育課文化財保護係）
3. 整理作業、報告書作成は市川秀之が行い、安有美子、吉本和美、山崎和子、若宮美佐がこれを補助した。
4. 狹山神社の山崎修宮司には調査の全体において大変な協力を得た。改めて謝意を表したい。

## 目 次

1. 調査に至る経過 .....	1
2. 地理的環境、歴史的環境 .....	4
3. 狹山神社の概要 .....	4
4. 1区の調査結果 .....	5
5. 2区の調査結果 .....	11
6. まとめ .....	13

## 挿 図 目 次

第1図 大阪狭山市周辺地形分類図（豊田兼典氏原図作成） .....	2
第2図 大阪狭山市内の周知の埋蔵文化財包蔵地 .....	3
第3図 狹山神社遺跡地形模式図 .....	6
第4図 狹山神社遺跡91年度調査区位置図 .....	8
第5図 狹山神社遺跡91-1区断面図 .....	9
第6図 狹山神社遺跡91-2区平面図・断面図 .....	10
第7図 92-1区・92-2区出土遺物実測図 .....	12

## 図 版 目 次

図版1 狹山神社遺跡92-1区 遺構 (a. 発掘状況、b. 西トレント第1面)	
図版2 狹山神社遺跡92-1区 遺構 (a. 東トレント第4面、b. 西トレント第5面)	
図版3 狹山神社遺跡92-1区 (a. 遺物、b. 瓦拡大)	
図版4 狹山神社遺跡92-2区 遺構 (a. 調査状況、b. 遺構全体図)	
図版5 狹山神社遺跡92-2区 (a. 遺物1、b. 遺物2)	

## 1. 調査に至る経過

大阪狭山市半田5丁目に所在する狭山神社は延喜式神名帳にも記載される古社であり大阪狭山市を代表する文化財でもあるが、その裏側（東側）に広がる宮山と呼ばれる森林でも瓦などが出土することが古くから知られていた。昭和42年に刊行された狭山町史には「社殿の背後は御廟所と伝えられ、その付近には藤原末～鎌倉初期と推定すべき古瓦が散乱している。この社地にはもと安楽寺があったというが、あるいは南北朝の動乱のために火災に罹り、ふたたびもとのような建設ができなかったというようなこともあったのではないかろうか。その古瓦は退化した唐草分のある軒瓦、尾長巴の丸瓦などで火に遭った状態もよくわかる。」と記されている。

その後長く狭山神社遺跡の文化財的調査はおこなわれなかつたが、近年本市の文化財保護施策の一環として大阪狭山市教育委員会では継続的に調査を実施することとなつた。

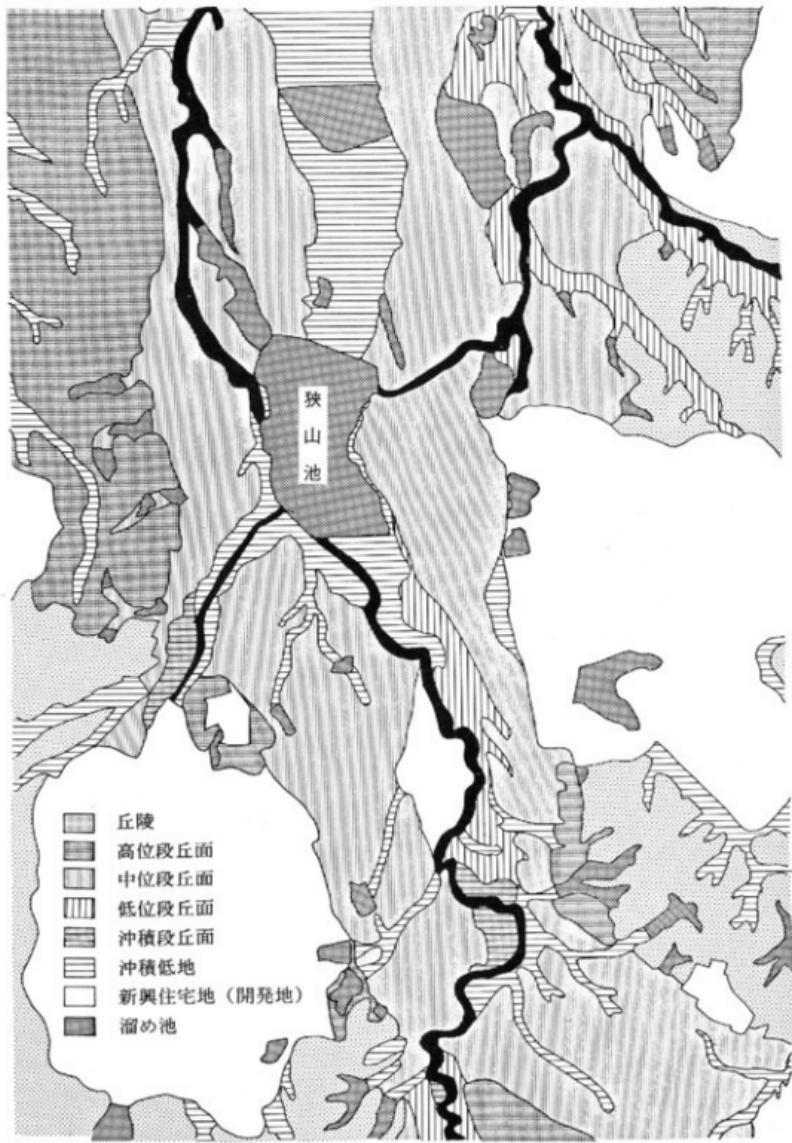
昭和63年本市教育委員会では、市内在住の考古学者、故末永雅雄先生（文化勲章受賞者）の指導のもとにこの宮山の測量調査を実施した。その結果本殿の裏、宮山の中位段丘面には、高さ1mほどの土壘状の高まりが1辺約60mのコの字状にめぐらしが確認された。また土壘の外側、内側には溝が認められた。翌平成元年度には宮山の一部の試掘調査を実施した。その結果大量の瓦や、鋳造遺構とおもわれる焼土壙などを検出している。これらの調査結果をあわせば宮山においてみられる遺跡の性格として寺院を考えるのが妥当と思われる。ただ神社の北側に「シロ」という小字名がみられること、「南山巡狩録」に建武四年（1337）南朝方の高木氏、佐備氏などが北朝方の半田城を攻めた記事がみられること、現在に残る宮山の土壘の存在などは、この地に中世城館が存在した可能性を示しており、遺跡の性格の本質的な解明は今後の課題である。

本書には平成2年度、3年度に実施した1区、2区の2箇所における調査の報告を掲載している。1区は狭山神社が大阪府の縁の百選に選ばれたことに伴う参道の整備工事に先立って実施した調査である。この工事は参道の両側に3段程度の石組みを設け、また樹木の植えかえをするといった小規模なものであったため、調査は参道の2箇所においてトレノチを掘削し、主として断面の観察によって参道の変遷を探ることに重心を置いた。また2区は狭山神社本殿の東側に広がる宮山内において行った学術調査で、この調査でも樹木を可能な限り保存して調査区を設定したため、調査範囲は3.3m×5.0mという狭い範囲にとどまつた。

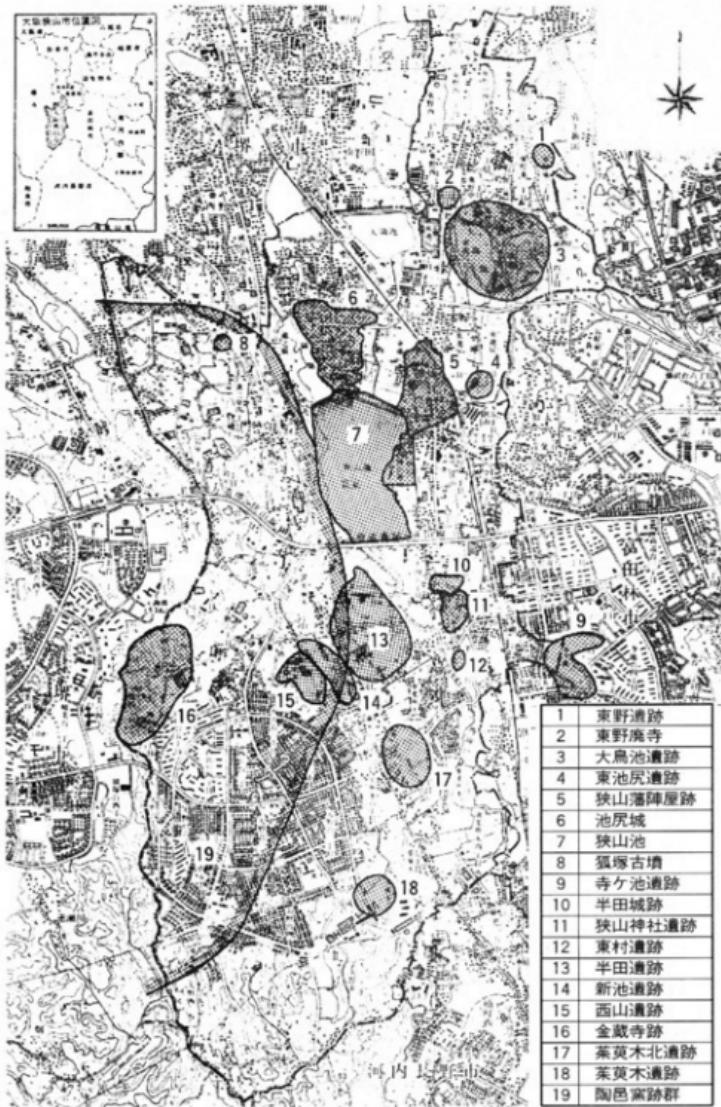
「狭山町史 第1巻 本文編」昭和42年 南河内郡狭山町

「大阪狭山市文化財報告書2 狹山神社遺跡測量調査報告書」 平成元年 大阪狭山市教育委員会

「大阪狭山市文化財報告書3 狹山神社遺跡試掘調査報告書」 平成2年 大阪狭山市教育委員会



第1図 大阪狭山市周辺地形分類図（豊田兼典氏原図作成）



第2図 大阪狭山市内の周知の埋蔵文化財包蔵地

## 2. 地理的環境、歴史的環境

大阪狭山市は東を羽曳野丘陵、西を泉北丘陵で囲まれていて、羽曳野丘陵稜線は市域外となるが、泉北丘陵の一部陶器山丘陵の稜線が西接する堺市との境界線となっている。市の全面積のうち約4分の1が丘陵である。市のはば中央には狭山池が所在し、南から西除川（天野川）、三津屋川（今熊川）が流入し、北の東除川、西除川へと流出している。狭山池の築造以前には、西除川がまっすぐ北流し、幅300m前後の谷底平野を形成していた。狭山池はこの谷底平野をせきとめて築造された。また市内の所々には河岸段丘が認められる。羽曳野丘陵、泉北丘陵に挟まれた幅約1.5kmの平野は谷底平野や開拓谷以外の大部分が中位段丘面で、段丘崖は南にいくほど谷底平野との比高差が大きくなる。今回調査対象となった狭山神社もこの段丘を利用した占地である。

ついで付近の歴史的環境についてふれたい。大阪府の南部、泉北地方には、大阪でもっとも広大な洪積台地が広がり、古くから生活の場となってきた。大阪狭山市内では東野、ひつ池、池之原からナイフ型石器が、また寺ヶ池からは有舌尖頭器が出土している。縄文時代の遺跡としては、寺ヶ池、池之原、東村、池尻新池、へど池、上明池、大鳥池などで石器が採集されているが、いまだ明確な集落跡はみつかっていない。弥生時代の遺跡については、後期の集落跡として茱萸木遺跡があげられる。古墳時代後期に至って当地域の遺跡は増大する。台地や開拓谷の傾斜面を利用して須恵器窯の築造がはじまり、また日本最古の灌漑用溜池といわれる狭山池が谷底平野をせきとめて築かれている。近年ではこの谷底平野において池尻遺跡など古墳時代の集落跡、水田跡などが調査されている。中世の遺跡の代表としては池尻城跡、半田遺跡があげられる。ともに近年大阪府教育委員会によって大規模な調査がおこなわれているが、池尻城跡では13～14世紀の城館が、また半田遺跡では中世の集落跡が出土している。いずれも地形を生かした遺跡の立地を示しており、ことに中世の池尻城跡は狭山池の西北にのびる段丘崖を防衛線として利用したもので狭山神社遺跡の地形環境を考える上でも重要である。中世末から近世には今日の農村に連続する集落が形成され、また北条氏によって狭山池の東北に狭山藩陣屋が築かれる。狭山藩陣屋は近世を通じて連続し、その故地周辺には今日でも多くの公共施設が集中し、市内の中心地を形成している。また布設の時代は明確ではないが、市内には西高野街道（堺～高野山）、下高野街道（天王寺～高野山）、中高野街道（平野～高野山）の三本の高野街道が通じている。狭山神社宮山のすぐ東側にも中高野街道が通じており、遺跡の性格を考える上で他地域との流通を考慮する必要がある。

## 3. 狹山神社の概要

狹山神社は「延喜式」神名帳に記載されている式内社で、天照大神、天児屋根命、素戔鳴尊、稻田姫命を祭神とする。縁起によると崇神天皇の時代に建立されたと伝えられる。現存する本殿は、建築史的には近世初期のものといわれ、段丘崖を背後に建てられて

いる。拝殿は文化13年、客殿は天保7年に建立されたものである。狹山神社は郷社であったため敷地内には明治の合祀令によって合祀された神社がいくつか存在するが、そのうち狹山堤神社は「延喜式」神名帳に大社として記載された古社であり、狹山池の守り神としての性格が指摘されている。狹山神社は近世には牛頭天王社とよばれ、半田村の鎮守であった。明和2年（1765）に作成された半田村差出明細帳（中川家文書）には次のように記されている。

「除地氏神境内ニ而御座候

安楽寺 同國丹南郡丹南村来迎寺末寺大念仏宗

除地 壱畝五歩

（中略）

一、神社

境内除地武町七反弐畝拾弐歩

氏神 牛頭天王

境内除地三畝五歩

若宮

除地九歩

舟乗明神留芝原」

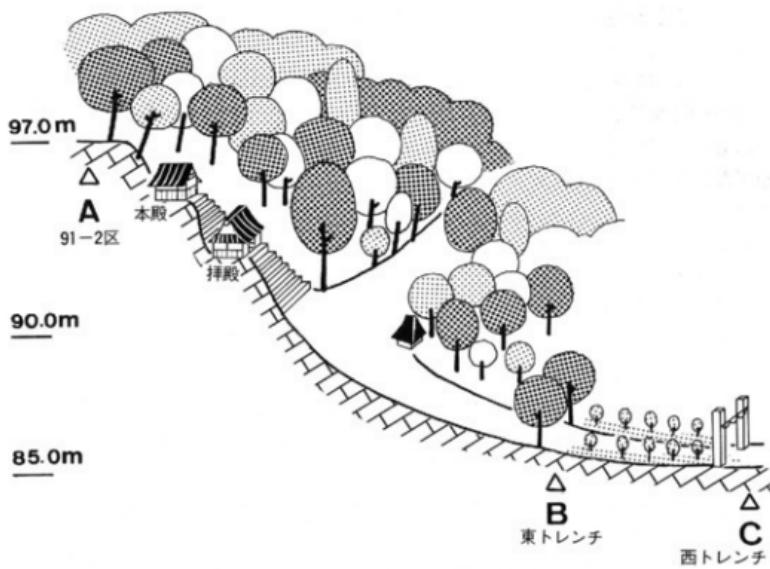
これによって氏神牛頭天王（狹山神社）の境内に大念仏宗の安楽寺が存在したことがわかる。大念仏宗（融通念仏宗）の教線拡大は近世以降のことと考えられるが、中世にはそれに先行する寺院が存在した可能性が強く宮山から出土した瓦等との関連が注目される。明治以後狹山神社は付近の諸社を合祀し近在の信仰を集めることとなった。現在は境内社である戎社の十日戎や、各村落から出される地車が境内をかけまわる秋祭りが有名である。また境内やその裏山であるいわゆる宮山には樹木が鬱蒼と生い茂り、近年都市化が進む本市においては貴重な自然環境を提供している。

『狹山町史』第1巻 昭和42年

#### 4. 1区の調査結果

先にも記したように狹山神社は大阪府の縁の百選にえらばれ、それに伴う整備事業の一環として参道の整備が計画された。この事業は参道の両側に3段程度の石垣を並べ、また木を植えかえるといった内容で、埋蔵文化財に対する影響はほとんどなかったため、参道の東西の両端において幅1m程度のトレンチを人力で掘削してその断面を観察するという調査方法を採った。

1区の両トレンチあるいは宮山の2区の位置関係は第5図の通りである。またそれらの高低を模式図的に示したのが第3図である。現在の狹山神社の本殿、拝殿は段丘崖を利用

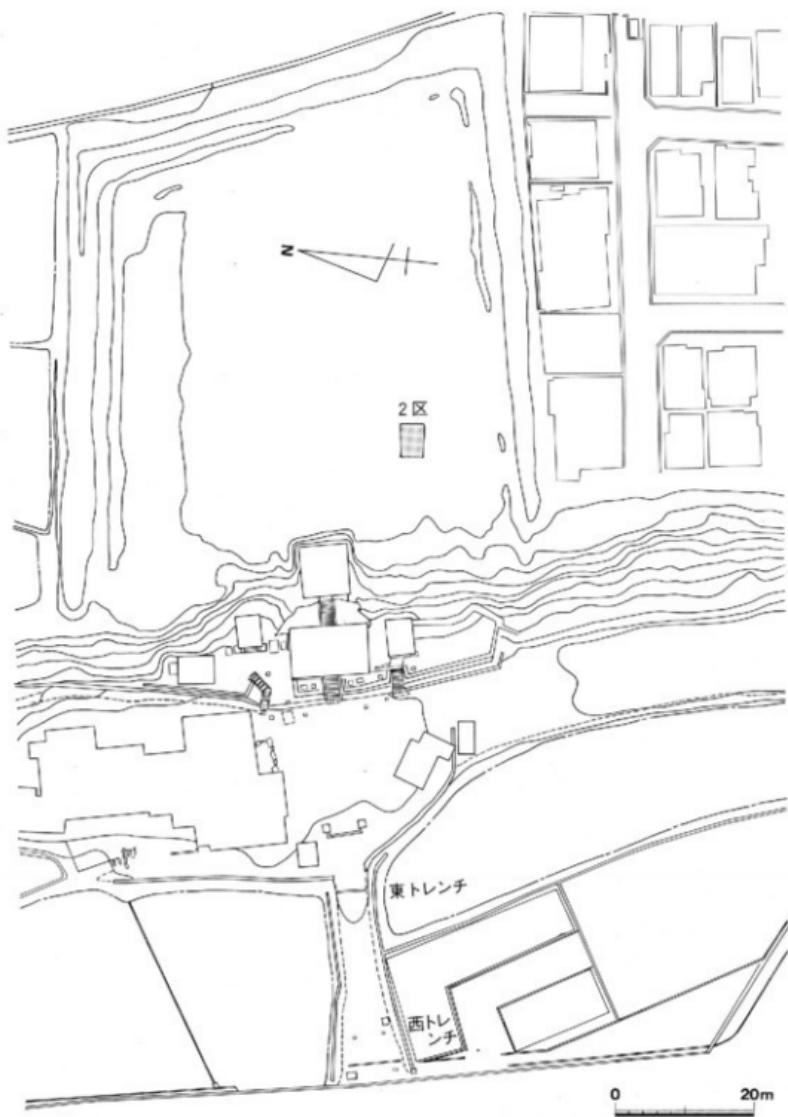


第3図 狹山神社遺跡地形模式図

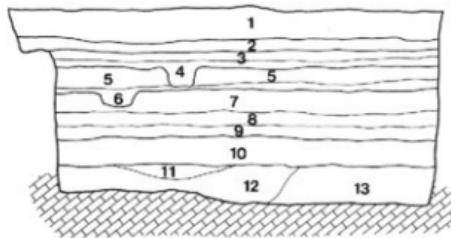
して階段状に築かれているが、参道は本殿、拝殿と現在の府道美原長野線を東西に結んでいる。

断面の観察あるいは掘削の際の平面的な調査の結果によれば、参道は6回にわたって盛土されていることがわかる。最下層は沖積層と考えられる砂層でその上に水田作土と思われる暗灰色粘土がある。この層からは羽釜、瓦器、スノ目のついた瓦片などが出土している。年代はいずれも14世紀から15世紀にかけてのものであり、今日みられる参道が形成されたのはそれ以後のことと考えられる。水田を参道にする際、最初に作られたのは幅5.0mの小規模なものであった。入口側の東トレントを観察する限り参道は今日みられる平坦なものではなくかまぼこ型の断面を示している。この層からは遺物の出土はなく参道造成の性格な時代は不明である。その後参道は何度か嵩上げされるとともに横幅を広げている。再び東トレントを観察すると、最初の参道の北側に2段の石垣を積み、それを北端にして褐色の砂質土を盛っている。南端が未調査なので幅は不明であるがすくなくとも6.0m以上の幅をもつ参道となっている。この層の石垣中からはスノ目瓦片が出土しているが、これは宮山で出土するものと同じであり、前時代の遺物が混入したものと考えられる。また褐色砂質土からは土師器小皿、備前焼すりばち、瀬戸美濃系陶器などが出土している。いずれも近世前半の所産と考えられる。その次の時代には参道の幅はさらに拡大する。前時代に築かれた石垣もふくめて黄褐色シルトの盛土がなされ幅は調査区の幅である7.0mを上回るようになる。この層からは多量のいぶし瓦、伊万里焼の茶碗などが出土している。いずれも近世後期のものと考えられこの時期に参道の拡大が計られたものと考えられる。現在狭山神社をはじめとする南河内の秋祭りではだんじりが主役となっているが、あるいはだんじりの導入がこのような参道の拡大の背景にあるのかもしれない。その後も三度の盛土がなされているがこれらの層からはいずれも遺物は検出されておらず時代的な特定はむつかしい。東側トレントの最上層の断面に如実に表現されているようにこれらの盛土は、参道の一部とくに両端部の土が流出しへこみが生じた際に盛られたものであろう。西トレントは盛土の厚さが2.0mであるのに対して東トレントのそれは1.2mであり、府道側の盛土が厚くなっている。

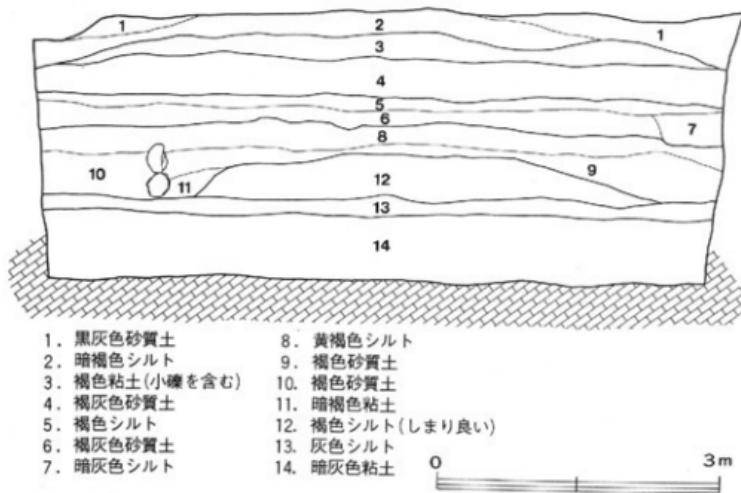
ついで遺物の説明を加えたい。今回の調査では調査面積が狭かったため遺物の量は少なくしかも細片のものが大多数であった。第7図の1は和泉型の瓦器碗。粘土層に埋まっていたためか炭素の付着はほとんど見られず沈線も明確ではない。底部の高台は形骸化して三角形の断面を呈している。1は参道形成以前の暗灰色粘土中より出土している。2、3は褐色の砂質土中より出土。2は瓦質の甕、口縁は玉縁状で外面にはタタキ目が入る。4は平瓦の破片である。表面はじゅうぶんにいぶされ炭素が付着しているが、裏面はほぼ素焼きの状態である。裏面には墨書が認められる。上下の字は不明であるが、破片には「経」の字が認められる。4は隅瓦の瓦当部。文様は八弁花で全体によくいぶされている。



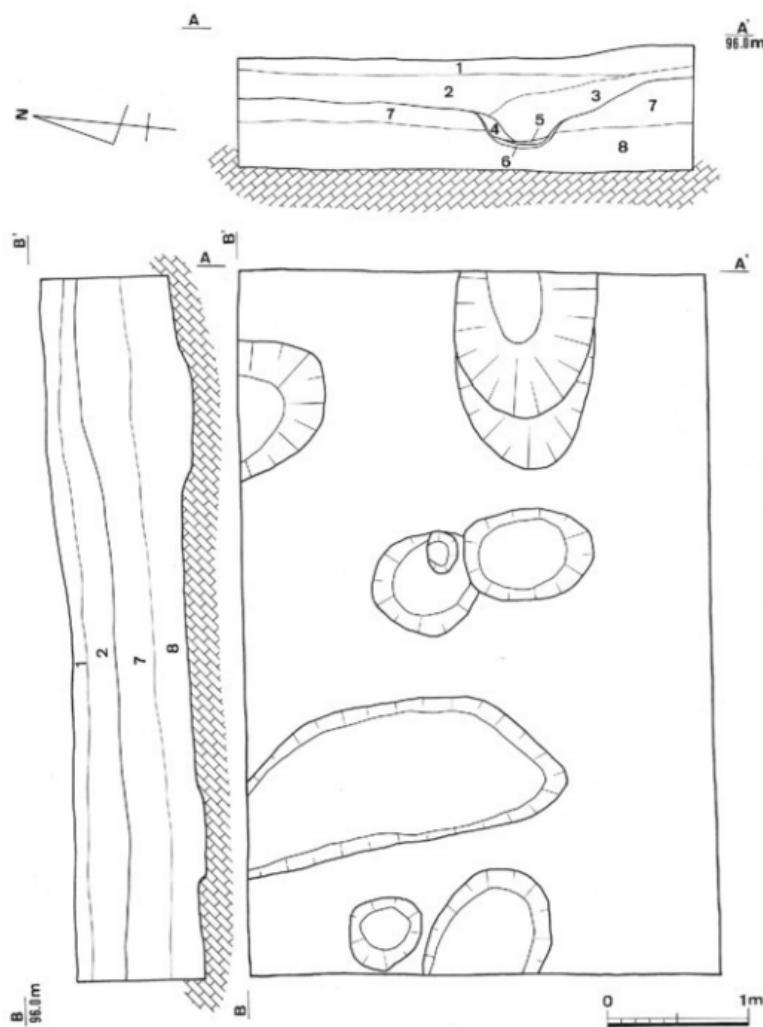
第4図 狹山神社遺跡91年度調査区位置図



- |                |             |
|----------------|-------------|
| 1. 淡褐色砂質土      | 8. 褐色砂質土    |
| 2. 灰色砂質土       | 9. 褐黄色砂質土   |
| 3. 褐色砂質土(やや粗)  | 10. 灰色シルト   |
| 4. 淡褐色砂質土(やや粗) | 11. 褐色砂質土   |
| 5. 褐色シルト       | 12. 暗灰色シルト  |
| 6. 淡褐色砂質土      | 13. 暗灰褐色シルト |
| 7. 黄褐色粘土       |             |



第5図 狹山神社遺跡91-1区断面図 ( $S=1/60$ )  
(上→東トレンチ、下→西トレンチ)



- |            |           |
|------------|-----------|
| 1. 表土      | 5. 暗黑色炭灰  |
| 2. 灰黄色砂質土  | 6. 橙色燒土   |
| 3. 淡黃灰色砂質土 | 7. 明褐色砂質土 |
| 4. 淡褐色砂質土  | 8. 明褐色砂礫土 |

第6図 狹山神社遺跡91-2区平面図・断面図 (S=1/40)

## 5. 2区の調査結果

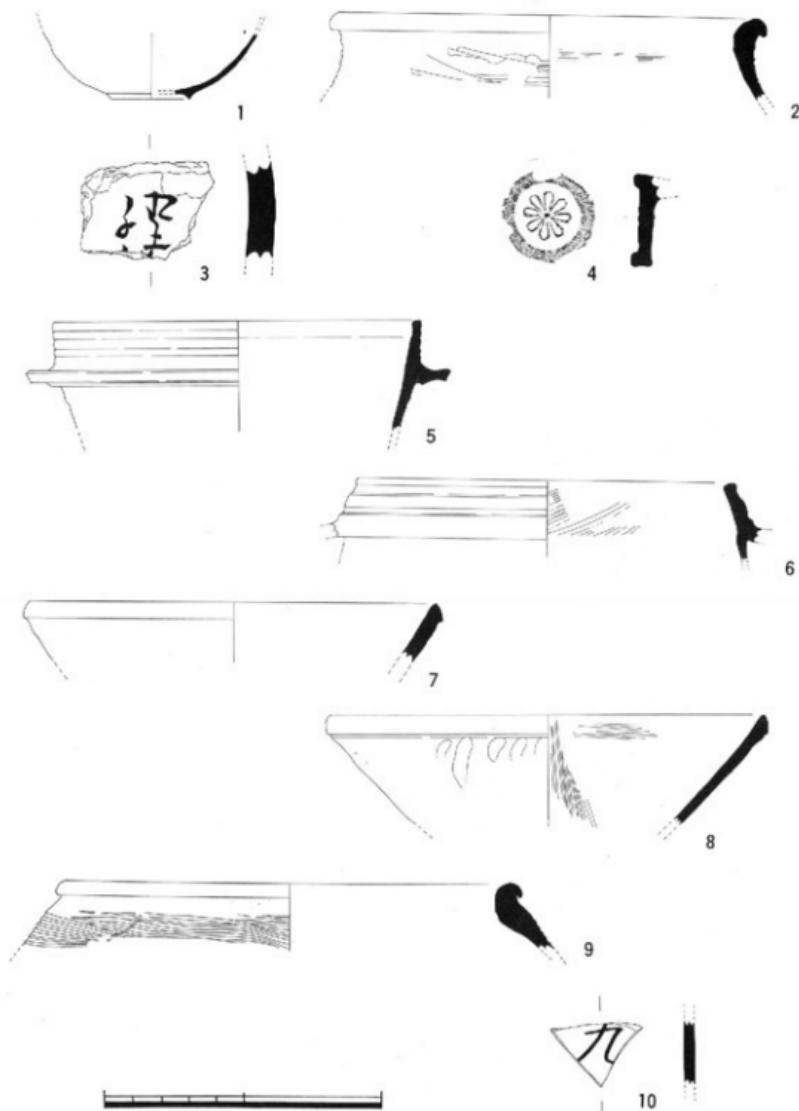
平成3年度事業として宮山の一部に3.3m×5.0mの調査区を設定し調査を行ったのが2区である。この調査は学術調査として狹山神社遺跡、ことに宮山地域の性格をより的確に把握するために行ったものである。今日の宮山はその名の通り樹木が生い茂っており、市内に数少ない貴重な緑地を形成している。そのため試掘調査の調査区設定においても樹木を伐採しないよう位置設定をした。

2区の層序は以下の通りである。表土は宮山の樹木の落葉によって形成された有機物を主体とした砂質土で、その下の灰黄色砂質土も基本的にはこの有機物層が土壌化したものと考えられる。この灰黄色砂質土の下が第1遺構面である。ただしこの面からはピットが1箇所検出されただけでその詳細は不明である。明褐色砂質土のさらに下で第2遺構面が検出された。この面においてはピットが5箇所と土塙2箇所が検出された。土塙1は南北方向35cm、東西方向45cmの楕円形で、底部は橙色に酸化していた。土塙内で恒常的に火を燃やしていたものと考えられる。平成元年度の調査でも焼土塙が出土しているが、今回検出したものは規模も小さく、前回推定したような鋳造関係遺構と断定することはできない。土塙1内からは平瓦片1個が出土している。土塙2は南北40cm、東西60cmでやはり楕円形をしている。遺物から考えてこの遺構面は13世紀から15世紀にかけての面であると考えられる。

つぎに遺物についてのべる。第7図の5～9はいずれも第2遺構面直上の包含層から出土したものである。5は羽釜。全体が灰褐色を呈しており、口縁外側に3つの段を持つ。鉢はほぼ水平にのびる。菅原氏の編年にいう河内D<sub>2</sub>型にふくまれ、時期的には15世紀のものである。6も羽釜であるが、5と比較して色調が赤っぽく、また口縁も内傾している。時期的には5にやや先行する河内D<sub>1</sub>型にふくまれよう。7は東播系須恵器の片口鉢。口縁部のみが残存しているが、口縁の内傾の程度から森田稔氏のいう神出II期に属するものと思われる。時期的には12世紀のものと考えられる。8もまた東播系須恵器の片口鉢である。ただしこの鉢はいつの時期にか火をうけており、表面は暗褐色を呈している。7と同様森田編年の神出II式にふくまれる。9もやはり東播系須恵器の甕である。10は黄褐色シルト層から出土した陶器片。丹波焼であるが小片であるため器種は不明。裏面に「九」の字が墨書きされている。

森田 稔 「東播系中世須恵器の成立と展開 一神出古窯群跡を中心に一」  
(『神戸市立博物館紀要』3 1986年)

菅原正明 「畿内における土釜の製作と流通」 (『文化財論叢』 昭和57年)



第7図 92-1区・92-2区出土遺物実測図 ( $S=1/4$ )  
(1~4は92-1区、5~10は92-2区出土)

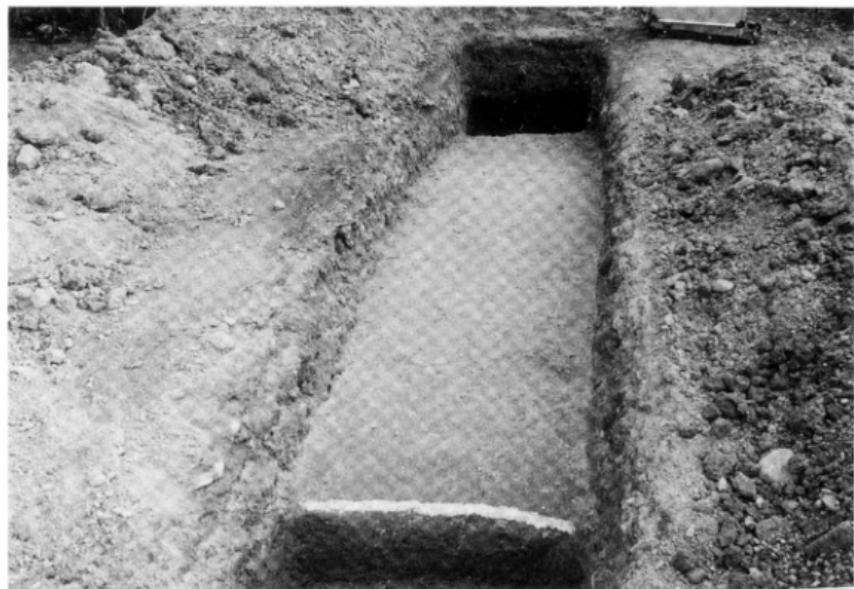
## 6. まとめ

今回の調査はいずれも小面積であったが、いくつかの新たな知見を得ることできた。1区においては、今日の参道が15世紀以降に形成されたことが明らかになった。現在の狭山神社は2箇所の鳥居、拝殿、本殿が参道の延長線上に一直線に並んでいるが、このような構成が比較的新しいことを今後の研究の前提にする必要があろう。また2区の調査では焼土壙が確認されている。既往の調査においても近くで焼土壙が確認されており、宮山部分の遺構の性格を考える上で貴重な資料となろう。今後も機会あるごとに発掘調査を実施し狭山神社遺跡の全体像の解明につとめることとしたい。

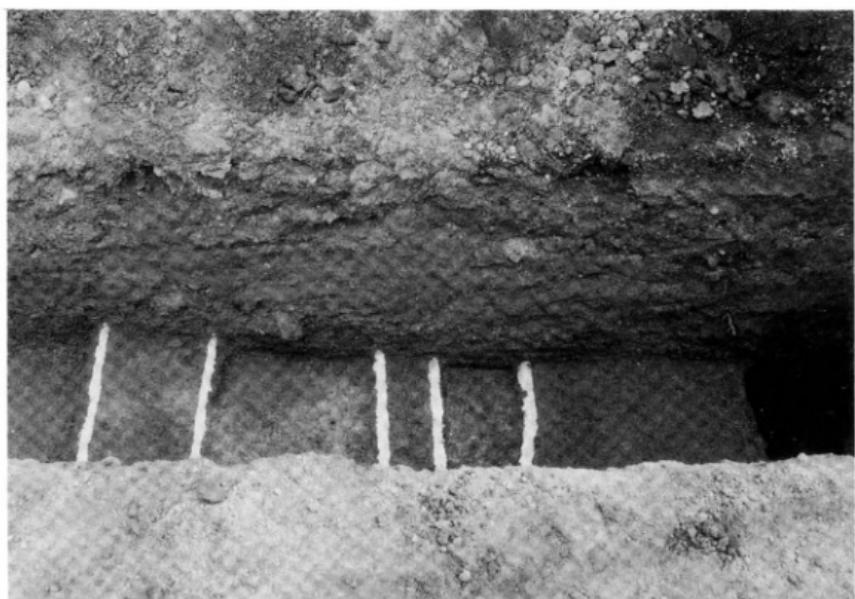
# 図版



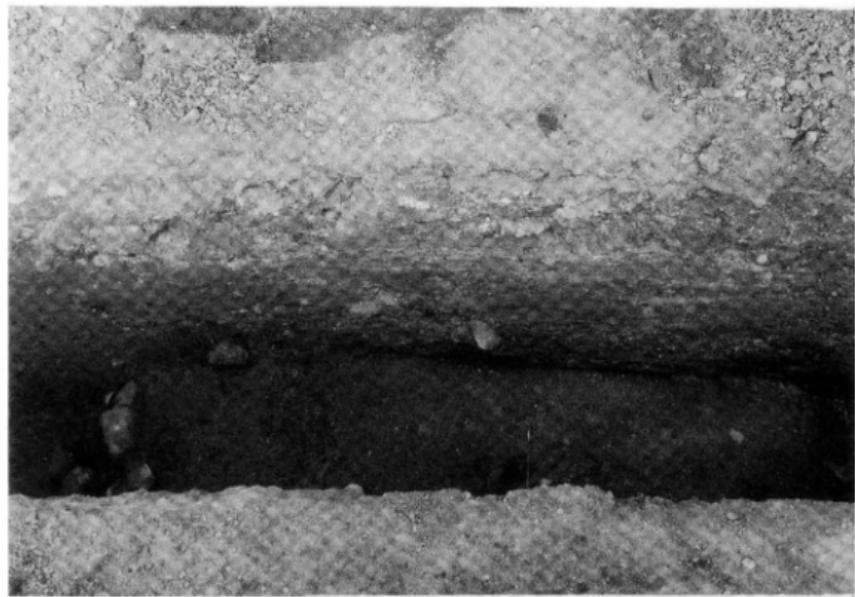
a. 発掘状況（西から東）



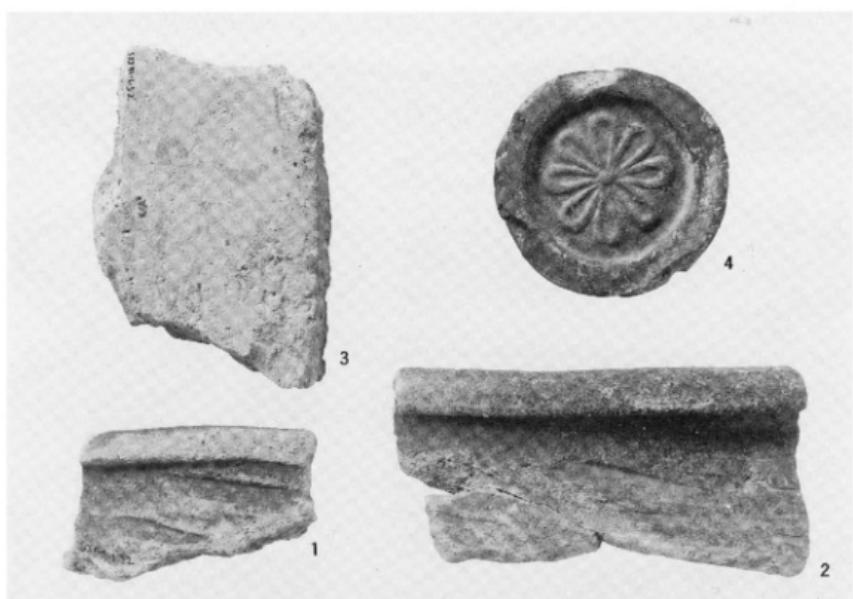
b. 西トレンチ第1面



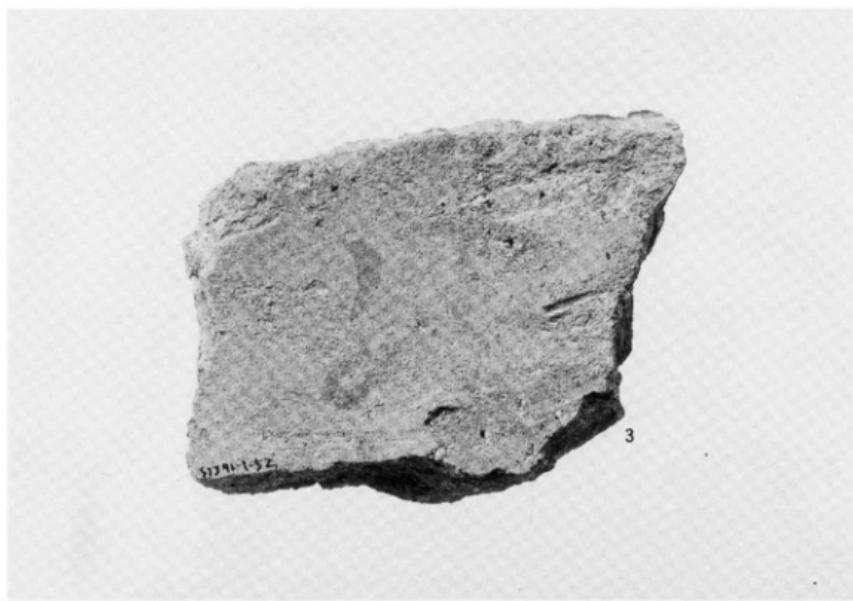
a. 東トレンチ第4面



b. 西トレンチ第5面



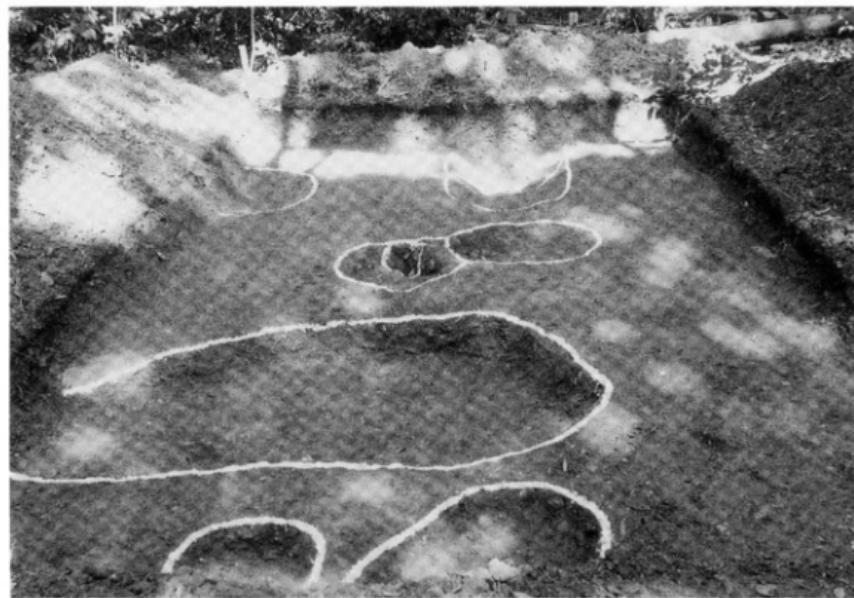
a. 遺物



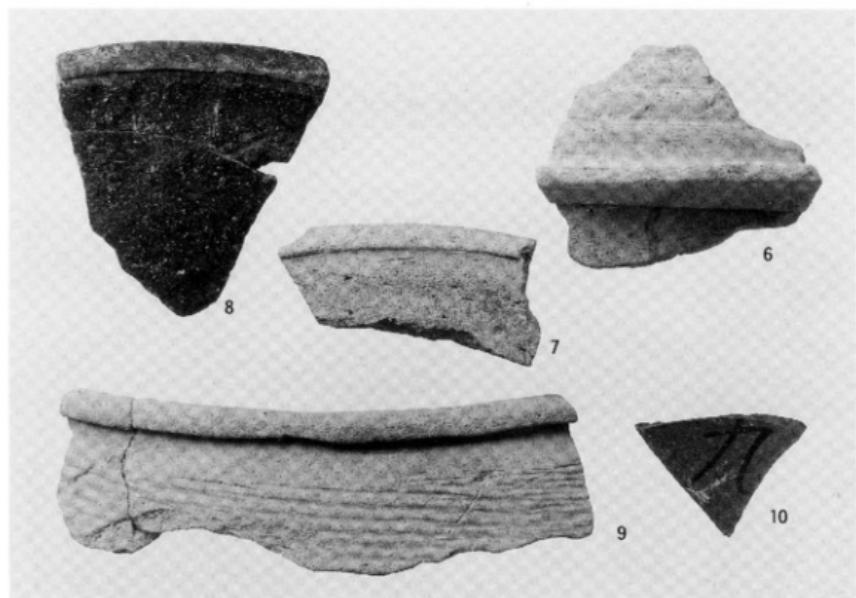
b. 瓦片大



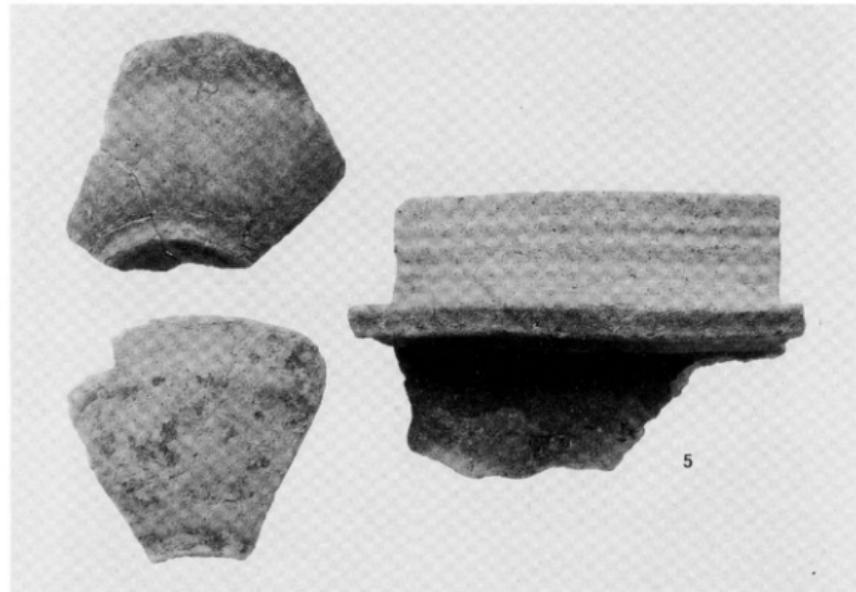
a. 調査状況



b. 遺構全体図



a. 遺物 1



b. 遺物 2

大阪狭山市文化財報告書 8

狹山神社遺跡  
試掘調査報告書 2

発行日 平成4年3月31日

発行 大阪狭山市教育委員会

☎ 0723-66-0011(代)

印刷 橋本印刷株式会社

